静岡の道の歴史

あこがれの富士山

〈企画・制作／静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

全国に張り巡らされた道路や鉄道。コロナ禍が収束すれば、皆さんもそれらを使って、ふたたび自由に旅を楽しむことができるでしょう。

実は日本に全国規模の道路網が造られたのは、今から1300年前のことになります。当時の都であった奈良を中心に造られた七つの路線は、総延長約6300kmにも及びました。これらの道路の利用は、税を運ぶため、都へ働きに行くため…など国の命令による出張にほぼ限られていました。

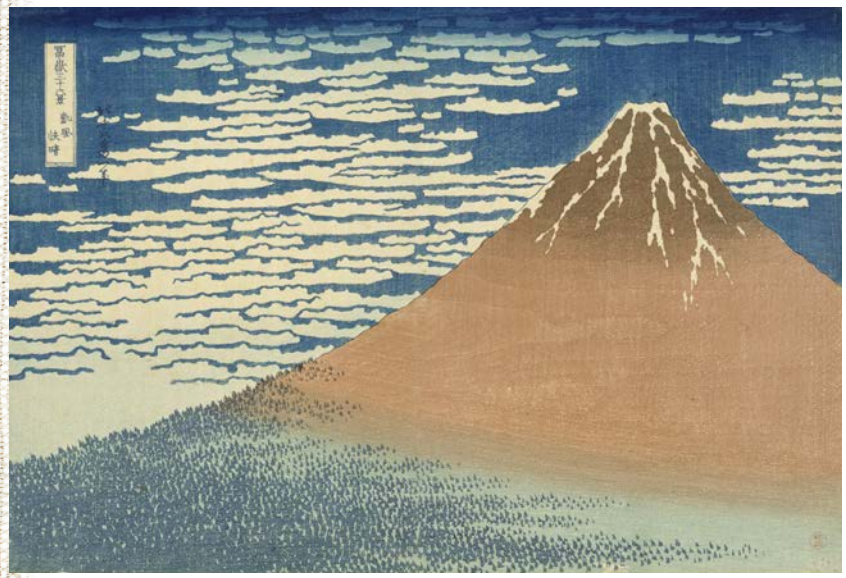
ただ出張とはいえ、これらの機会は人々にとっては自分たちが住む場所以外の世界を見る数少ないチャンスでした。旅先で見た美しい景色や珍しいものは、日記に記されたり、歌に詠まれたりして、それらはやがて多くの人々が知ることにもなりました。

県内の道を歩いた古代の人々は富士山の美しさを歌に込めました。

田子の浦に
打ち出でてみれば白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ

百人一首に取り上げられたこの歌は、奈良時代の歌人であり役人の山部赤人が東国へ行く途中で詠みました。ほかにも、貴族の少女の回想録「更科日記」では富士山頂から煙が立ち上る様子が書かれています。江戸時代には「弥次さん喜多さん」で知られる「東海道中膝栗毛」の旅が国民的人気になるなど、旅へのあこがれは続きました。

機会が限られていたからこそ美しい景色へのあこがれが募り、感動も増して後世に残る歌や紀行文が生まれました。今の私たちにはあって当たり前のように見える道が、どれほど大きな感動を与えてくれていたのか考えてみませんか。



冨嶽三十六景　凱風快晴
1831～33年ごろ　葛飾北斎　東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

（監修：近江俊秀・文化庁文化財第二課主任文化財調査官、中村羊一郎・静岡産業大総合研究所客員研究員、本郷和人・東京大史料編纂所教授）

2021年11月7日　静岡新聞「YOMOっと静岡」掲載